

バイサイドアナリストによるESG評価 —取り組みの現状と課題・展望—

渡辺 勇仁 CMA

目 次

- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 1. はじめに | 3. 資本市場の健全な機能発揮に資するESG評価に向けて |
| 2. バイサイドアナリストにおけるESG評価の現状 | 4. 今後の展望 |

ESG投資拡大の中で、評価機関によるスコアや指数選定など多様な評価軸が存在するが、バイサイドアナリストによるESG評価が企業・産業・社会のサステナビリティを高める重要な機能であることを、事例を踏まえて確認していく。その上で、バイサイドアナリストに関して、ESG評価に係る課題を示すとともに、今後のESG投資の見通しを踏まえた資本市場における役割についての認識を示す。

1. はじめに

ESG投資残高の増加だけでなく、E（環境）・S（社会）視点でのダイベストメント、ESG要素の企業価値との関連に関わる研究の進展などにより、機関投資家として企業分析・評価の全般を担うバイサイドアナリスト（以下、企業調査アナリスト）（注1）にとって、どのようにESG評価に取り組むかは重要課題となっている。その前段として、欧州での非財務情報の開示義務化、わが国では企業サイドに向けてのコーポレートガバナンス・コードと運用受託サイドに向けてのステューワードシップ・コード制定・改訂、年金積立金管理

運用独立行政法人（以下、GPIF）による国連責任投資原則（PRI）への署名、さらに気候変動リスクに対する世界的な関心の高まり、など様々な角度から企業調査アナリストにとってESG評価を重視すべき潮流が起きている。その底流には、企業の持続的価値創造を促すインベストメント・チェーン変革を求める考えがあり、それはわが国の成長戦略の一部にもなっている。こうした潮流と底流を踏まえるならば、企業の持続的価値創造の基盤となるESGについて、その評価の重要性が増すという方向性は不可逆的であると認識する。一方で、開示情報の質・量に企業間格差が大きい上に、財務諸表のように他社比較や時系列比較が



渡辺 勇仁（わたなべ ゆうじ）

大和アセットマネジメント(株)アクティブ運用第二部兼ステューワードシップ・ESG推進部チーフ・アナリスト（素材セクター担当）。銀行で営業・融資・投信投資顧問会社出向・アセットマネジメント、証券会社でアナリスト、事業会社でコーポレートベンチャーキャピタル業務に従事した後、2006年より現在の大和アセットマネジメントにてアナリスト。日本証券アナリスト協会ディスクロージャー研究会（化学・繊維）委員。